

4. まとめ

てんかん診療の現状

○回答のあった43病院のうち外来診療を実施しているのは32病院、入院診療は30病院であった。

○回答のあった201診療所のうち外来診療を実施しているのは73診療所で、約6割に相当する124診療所は外来診療が行われていなかった。

○調査対象については神経内科、脳神経外科、小児科、精神科・心療内科・神経科を標榜する県内病院・診療所としたが、調査対象の医療機関の中には内科として回答したところも多く、その外来受診人数（168人）を見ても、てんかん患者が内科においても診療を受けていることが示唆される。

てんかん患者の状況

○てんかん患者の受療者数は、医療機関に受診しているがてんかんとして把握されていない患者が相当数あると考えられるため、今回の調査では、主病名がてんかんでなくとも、てんかん病名のついた患者や検査入院等も含めて回答を求めたことで、平成27年10月の1か月間だけでも外来受診者3,805人、入院者707人と多くの患者がいることが判った。

○年齢層別の受療者で最も多いのが70歳以上で1,219人が受療しており、高齢者のてんかん発症が増加していると考えられる。小中高生（7～15歳・16～18歳）の年齢層も多く、574名が受療していた。

○外来では神経内科を受診する患者が最も多く1,201人、次いで脳神経外科859人、小児科633人、精神科480人、その他379人の順であった。

○入院では精神科に入院する患者が最も多く290人、次いでてんかんセンターを含むその他診療科130人、小児科91人、神経内科67人、内科55人、脳神経外科54人と続く。

○診療科別受診者を年齢層別でみると、年齢が上がるにつれて神経内科や脳神経外科を受診する患者が増えている。

てんかん診療の課題

○患者の紹介ができる医療機関リストの整備等、てんかん診療についての医療情報の整備、公開を

求める意見が非常に多かった。

○てんかん診療に対応していない理由として、他の医療機関に患者を紹介している医療機関は50.0%であるが、専門医療機関への紹介又はかかりつけ医への逆紹介など、患者の紹介がしやすい医療連携体制の構築が課題である。

○また、てんかん診療の医療体制の課題についての意見をまとめると、大きく分けて以下のような医療機関が必要であり、連携のための医療情報としての公開を求められている。

- ①発作時に救急対応可能な医療機関。
- ②検査設備が整っており、検査・診断が可能な医療機関。
- ③患者の病状等に応じた対応が可能な医療機関。
 - ・小児期から成人期への移行に際しての受け入れ先
 - ・発達障害や重度心身障害を合併している場合の受け入れ先
 - ・難治例の受け入れ先
 - ・精神症状を併発している場合の受け入れ先
 - ・てんかん患者が他の疾患で入院する際の受け入れ先 など
- ④てんかん患者が身近に受診・相談できる、かかりつけ医としての対応が可能な医療機関。

○小児期からのてんかん患者について、小児科から成人科への移行を課題とする意見は多く、成人以降の受け入れ先が不明確であること、患者情報の共有などの小児科と成人科との連携が十分ではないこと、てんかんと合併症の治療に対応できる医療機関の情報が乏しいことなどが挙げられる。

その他

○患者・家族への生活支援の充実、自動車運転等の生活上の留意点の説明、患者のライフステージに応じて、教育・福祉・労働分野等との連携をすすめることが必要である。

○てんかん診療を行う医師を養成するための専門的な研修が必要である。